

学^{じっけ}の実化【関西大学文学部&RYLA国際委員会連携】公開講座
RYLAワークショップ2007

青少年の「からだ」の問題を考える

～ロータリークラス青少年指導者養成プログラムの開発に向けて～

報告書

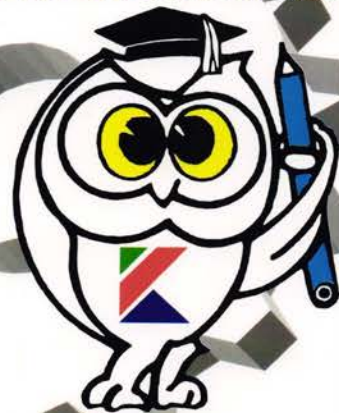
RYLA

Rotary
Youth
Leadership
Awards



ライラとは？
ロータリークラブの
青少年指導者養成
プログラムです。
世界の国々で実施
されています。

KANSAI UNIVERSITY



日時 2007年5月26日(土) 14:00～16:00

会場 関西大学 新関西大学会館北棟・1階ホール

主催 関西大学文学部
国際ロータリー第2660地区青少年活動委員会

主管 関西大学文学部総合人文学科身体運動文化専修

青少年の「からだ」の問題を考える
～ロータリークラブ青少年指導者養成プログラムの開発に向けて～

目次

はじめに	3
講座開設の経緯	4
プログラム	6
アンケート結果から	13
課題と展望	16
資料	18

はじめに

本講座は、まったくの新たな試みによる開設であった。何か事業を起こすという新たなものへの挑戦には勇気と決断が必要である。前例がないことや、時期的に尚早ではと不安がでてくる。しかし期待感もまた大きいものがある。

講座開設の経緯については、本講座の中心的役割を担ってくれた本学文学部身体運動文化専修の安田忠典准教授から報告があるものと思われるので、ここでは省略させていただくことにするが、異年齢層の方々とのかかわりが少なくなった昨今の学生にとって、人生経験豊富な、しかもロータリークラブのRYLAに携わっておられるの方々との対話はまたとない機会であり、何の不安もなく期待感のみでスタートした。

参加学生からは「人生観を見つめるいい機会になった」「自分自身を見直せたような気がする」「これからの就職活動の参考になった」等の声が多く聞かれ、就職活動前の学生にとって、この経験は以後の生活設計において貴重なものとなったようで、講座開設の意義が大きく膨らんだことに喜びを感じている。

ロータリークラブの皆様方の献身的な努力により当初の目的が達成されたことと同時に、関西大学においては、よりよい教育・研究の新たな試みができることの喜びでいっぱいである。あらためてロータリアンの皆様様に御礼を申し上げたい。また、ご協力いただいた関係者の皆様に感謝するとともに、両者間の友好関係がますます深まり、次のステップと発展していくことを願って挨拶としたい。ありがとうございました。

関西大学文学部総合人文学科
身体運動文化専修・体育学教室
代 表 溝 畑 寛 治

講座開設の経緯

他に例をみないユニークな連携講座の開設に至るまでには、国際ロータリー2660 地区青少年指導者育成委員会と関西大学文学部身体運動文化専修・体育学教室との間で、十分な信頼関係を築くための助走期間を設けてきた。

この事業の端緒となったのは、平成17年3月11日(金)大阪市舞洲野外活動センターで開催された全日本RYLA(ロータリークラブ青少年指導者養成プログラム)大会における、関西大学文学部教授の伴義孝の「青少年よ、重力と遊べ」というタイトルの講演であった。伴を招いた北山孝和(当時)を委員長とする国際ロータリー第2660地区青少年活動委員会の活動理念と、招かれた伴の関西大学文学部身体運動文化専修・体育学教室が開発していた「新しい学びの様式」を標榜する「循環型連携教育研究」の理念が、非常に親和性の高いものであることを双方が理解し、ロータリーと大学が連携したユニークな青少年指導者養成活動の展開を模索することを約束したのである。

すなわち、実業の世界で活躍しているロータリアンからみた現代日本の青年たちが抱える経験不足やそこからくる自信の喪失といった問題点は、関西大学の「身体」を扱う教員集団が取り組んでいた近代以降の社会における「身体性」の喪失とそれに起因する実体験不足や「育ちそびれ」の問題と同根であり、その問題を乗り越えて若者が頼もしく育つためのプログラムは、座学偏重型ではなく体験教育重視型でなければならない。

とくに、わが国の学校教育は同年代の生徒・学生を囲い込む方式が基本であるために、異世代や学外との交流が少なく、そのことが学生の経験不足を助長しているという傾向にある。しかし、RYLAはロータリアンが推薦する14歳から30歳までの青年が対象で、社会人も多く参加するという多様さを持っており、両者が交流することのメリットは大きいと考えられた。しかも、すべての行事には地域社会の第一線で活躍する高度な職業人であるロータリアンが参加・参画しているので、普段は直接交流する機会がない立場の者同士が協働する貴重な経験の場を創出できる手ごたえがあった。

それ以後、伴をはじめとして、教室代表であった溝畑寛治、若手の安田忠典らが、定期的に国際ロータリー第2660地区青少年活動委員会へ出席させていただいて計画を練った。その間、任期一年である青少年活動委員会委員長は北山から泉博朗へと移り、関西大学サイドの春・秋のRYLAプログラムの視察、関西大学学生の参加などさらなる交流を経て、今回のRYLAワークショップ開催へと漕ぎつけたのであった。

このような経緯を経て、今回のワークショップは、第 2660 地区青少年活動委員会から関西大学文学部への寄附講座として企画された。社会奉仕を旨とするロータリー側からは、講座開設にかかる資金が提供されることになった。一方、寄附を受けた関西大学側からは、それ自体がまだ新しい試みであったRYLAワークショップの内容について、「身体性」を手掛かりとしたプログラムを提供することになった。さらに、教室で開発してきた「循環型連携教育研究」の成果である新しい形式の授業「実践研究：地域社会の身体運動文化」履修者を中心とした学生による運営を前面に押し出すことにした。もちろん、文学部としては就職活動などに直接役に立つと思われる貴重な機会でもあるこのワークショップを最大限に活用させていただくことにして、授業学生の参加だけでなく、広く一般学生からも参加者を募った。

結果として、非常にユニークなこの講座は、本報告書のとおり大成功をおさめ、これまでの両者の活動は寄附講座「かかわり学びの実践学」へと昇華し、全国的にも類例をみないロータリーと大学が連携する青少年育成事業として 2008 年度秋学期の開講を待っている。最後に、この場をお借りして、これまで関わってくださったすべての関係者に御礼を申し上げたい。

(関西大学文学部准教授 安田忠典)

学の実化^{じっげ}【関西大学文学部 & RYLA国際委員会連携】公開講座

青少年の「からだ」の問題を考える

～ロータリークラブ青少年指導者養成プログラムの開発に向けて～

1. 日時 : 2007年5月26日(土) 14:00~16:00
2. 会場 : 関西大学「新関西大学会館北棟・1階ホール」
3. 主催 : 関西大学文学部
国際ロータリー第2660地区青少年活動委員会
- 主管 : 関西大学文学部総合人文学科身体運動文化専修

[プ ロ グ ラ ム]

総合司会 : 田村典子 (関西大学文学部教授)

- (1) 開 会 : 奥 純 (関西大学文学部長)
- (2) 問題提起 : 「共感し響き合う [からだ] と東洋的身体技法について」
提案 : 伴 義孝 (関西大学文学部教授)
- (3) 太極拳表演 : 「楊式伝統太極拳」
表演 : 劉 莉 (知音太極拳研究会主宰)
- (4) やってみる : 「心身一如の働きをみんなで体験してみる」
指導 : 劉 莉
- (5) ミニシンポ : 「青少年の [からだ] の問題とリーダーシップについて」
井上暎夫 (ロータリークラブ地区パストガバナー)
劉 莉 (知音太極拳研究会主宰)
伴 義孝 (司会・関西大学文学部教授)
- (6) 学の実化^{じっげ}講座 : 学生とロータリアンのグループ討議
テーマ = 「社会の求めているリーダーシップ」
※内容 : テーマについて下記の要領で話し合う。
①学生2名・ロータリアン2名の合計4名程度でグループ討議を行う。
②企画の意図 : 学生は社会の第一線で活躍するさまざまな職業領域の「ロータリアン=社会のリーダー」の「人生観」や「ものの見方」などに触れてほしい。
- (7) 閉 会 : 泉 博明 (ロータリークラブ地区青少年活動委員長)

ロータリークラブとは？

ロータリークラブは、1905年に、アメリカのシカゴにおいて最初のクラブが誕生。
日本のクラブは、1920年に、東京に初めて誕生。

目 的 = 「職業奉仕」(会員の職業倫理を高める)
そして、「社会奉仕」と「国際親善」。
そのために、「*I serve*」:私は奉仕する」を基本として行動する。

行動基準 = ロータリアンは次の「The Four-Way Test」を言行の基準としています。

- (1) 真実かどうか (*Is it the TRUTH?*)
- (2) みんなに公平か (*Is it FAIR to all concerned?*)
- (3) 好意と友情を深めるか (*Will it build GOODWILL and BETTER FREINDSHIPS?*)
- (4) みんなのためになるかどうか (*Will it be BENEFICIAL to all concerned?*)

モットー = 超我の奉仕 (*Service Above Self*)

⇒ *Service Above Self.*

He profits most who serves best.

RYLA (ライラ) について

ライラとは、Rotary Youth Leadership Awards の頭文字をとったもの。ライラとは1971年に国際ロータリークラブで採用された青少年指導者養成プログラムです。世界に国々で実施されています。

RYLAの目標は次のとおりです。

- ① ロータリーの青少年(14歳から30歳まで)への尊重や配慮を身をもって示すこと。
- ② 選ばれた青少年や潜在性を有する将来の指導者に対して効果的な研修を与えること。
- ③ 青少年の指導力を青少年によって促進させること。
- ④ 地域社会のために奉仕を行う青少年を認証すること。

— 以上 —

太極拳について

太極拳とは東洋哲学の重要概念である「太極」思想を取り入れた護身術および健康法。「太極」は「易経」から出発し、宋代に発展した思想「太極」とは、宇宙の原始は陰陽未分化で混沌とした状態を表している。形成万物（宇宙）の根源。太極拳のトレードマークになっている「太極図」は宇宙の運行を示している。

楊式太極拳（伝統拳）

陳家溝で太極拳を学んだ楊露禪が北平（北京）に出向いて伝えた。露禪は実戦高手として楊無敵と讃えられ、その評判ゆえに請われて多くの者に教授した。その拳は非常に柔らかな動きで、「綿拳」「化拳」と称され伝えられたという。

現在の「制定拳」（中国政府が第2次世界大戦後に普及のために制定した「簡化太極拳」）はこの楊式をベースにして構成されている。

劉 莉さんのプロフィール



1962年中国・天津市生まれ。天津市体育学院体育科武術専攻卒。天津市和平区少年宮教師。1988年神戸に来日。武庫川女子大学運動生理学研

究科研究生・神戸大学大学院教育研究科修了（修士号）。神戸大学大学院自然科学研究システム科学研究生。知音太極拳主宰。現在、関西大学非常勤講師（保健体育科目）。8歳より中国武術を学ぶ。訳書に『太極拳要訣：楊式太極拳の套路・技術分析』ほか。

太極拳の心得・「放松」のころ

劉 莉

はじめに

日本にきて太極拳の普及など日中の架け橋として努力していこうと思うようになってから、日中間に同じ文化という大きな流れの中に隠されている違いを感じはじめました。また、太極拳に関する研究から疑問、指導現場に存在する問題などにも文化の違いが反映していると思います。あまり難しくして簡単に手を付けられるようなものでないで、太極拳の世界では、意識的あるいは無意識的にそれを避けることで、次第に意識もしなくなっていくでしょう。しかし、その中に太極拳に関する何かがあり、それはまた大切なものであるような気がして仕方がありません。それについては、二、三の問題を取り上げて一緒に考えていきたいと思っています。

1. 太極拳における意識の働き

今まで郭先生の講習会にて通訳したり、『太極拳推手』という本を翻訳したりしたことなどから得た記憶に基づいて手探りで推手をやりはじめました。基本中の基本という平円単推手をする時にどうしても感覚を掴めないことがありましたので、天津に帰った時に郭先生に聞こうと思っていました。

しかし天津に帰って郭先生の傍で練習しているうちに質問する気がなくなりました。(日本で) 普段自分で練習する時に感じる疑問や、練習現場での問題などについて解明しようと気持ちがどこかに飛んでいってしまうのは、どういうことなのか不思議に思いました。質問を忘れたわけではないし、聞けないような関係ではないのに聞かずじまいになったのは、ほかでもなく気持ちが変わったとしか言いようがありません。ならばこのような気持ちに変化させてくれた要因は何かと考えていました。

中国では「跟老師学」(先生に学ぶ)という表現がありますが、「讓老師教」(先生に教えて貰う)ということは大変失礼な表現であり、使える言葉ではありません。一見すると単なる言語習慣の問題にみえますが、「跟老師学」の場合は自分から先生の方へ求める方向性となりますが、「讓老師教」の場合は先生に自分の方へ方向性を向かわせることとなります。このような方向性により全く異なる心構えが生じ、私たちの行動に大きく作用することは思いもつかないことでしょう。学ぶ側は気持ち、心構えは態度として現れ、場合によっては本気になって勉強に励み、場合によっては心の鏡を曇らせ勉強の邪魔になることもあるのではないのでしょうか。

天津での練習は「その気になれば、拾えるものはあるが、自分のレベル以上のものを求めることはない」ということを教えてくれ、その気にさせてくれたのでしょう。自然にそのような気持ちを私たちに与えてくれる人々は巨大なエネルギーを生み出し、驚くほどのパワーを感じさせられます。

私の身に起きたちょっとした不思議な体験はもしかしたら太極拳以前の問題であり、学ぶ人々にとって必要となる心の準備に過ぎません。この心の準備を有無或いは十分かどうかにより学習態度が変わり、結果も変わるでしょう。忘れがちになった心構えを時々意識

し、太極拳の練習をとおして再び蘇らせる必要があると思います。

私たちの意識の働きに影響を及ぼすのは言語習慣だけでなく、その他にも様々なものがあります。異文化を学ぶ前提として言葉への理解は最も重要なものとして、直接に関与するものです。特に太極拳のような中国文化をたっぷり含み、心身両面から極める拳法において「術語」への理解はなくてはならないものです。たとえば「放松」という言葉ですが、太極拳をある程度経験した人は誰でも口にしたり、耳にする言葉です。日本語に訳すと「リラックスとか、緩めるとか、力を抜くとか」などになりますが、これでは太極拳の術語「放松」の意味とは違います。「放松」とは余分なものを省くということです。つまり、その時の状況、需要に応じてエネルギーを最小限にして動くことです。しかし、このことを緩める、リラックスするという意味に理解された場合は意識の働きによって、緊張から解けた余裕のある伸び伸びとした動きの状態にもっていくことは不可能でしょう。

太極拳は守る拳法です。相手より力や立場など色々な面において弱いということを前提にした拳法は太極拳に限るのではないかと思います。太極拳は太極の理に基づくことを拳法の理とし、極めて重心のバランスと上手に体重を利用することを拳術とします。要するに体重が移動する際に生じるパワーを利用することと理解しています。ですから太極拳を始めた日から体重も左右、前後に移動する練習をし、体重移動という言葉も日常茶飯事のように使われていると思います。

一方、体重移動のことを中国ではどのように表現しているのでしょうか。「移重心」（重心を移動する）、「倒重」（重心を乗せかえる）、「座腿」（足を座らせる）とか様々です。では「体重を移動する」と「足を座らせる」との二つの表現によって結果を見てみますと、形成された動きの形にはあまり差はありませんが、形が形成されるまでの過程には質的な違いが生じます。要するに「体重を移動する」場合は体重を前後、左右への方向性が生じるのに対し、「足を座らせる」場合は下へ、つまり地面への方向性しか生じないことです。この方向性は太極拳の練習にとって大きなキーポイントとなっているかもしれません。

言葉への理解の違いによって、意識の働きが変化し、意識の働きにより深層に包まれていて、見えないのだが、触れられないのだが、また簡単に体験できないのだが、しかし、確かに幽かに感じることはできないものがあります。言葉の表面的意味とその深層に隠れている中身を理解することで認識が生まれます。その認識を意識の働きに導かれて、身体活動により得られた感覚反応に結び付け、照らし合わせることによってさらに認識し、再び感覚反応を高めるにつれ、意識の働きが明確化され、それを追求していく過程において得られるものは心身を共に健やかにしてくれるのではないかと思います。

王宗岳の『太極論』の最後の「差之毫釐、謬之千里、学者不可不詳辨焉」という言葉で締め括られています。その意味は、最初に生じる少しばかりの差をそのままにしてしまうと、やがて大きな過ちを生んでしまうということを、太極拳を学ぶ者が認識しておかなければならないということです。もしかしたら、言葉への理解に生じる違いのように、認識において小さな異なりは私たちが愛好している太極拳の根本を失う恐れもあるでしょう。

2. 太極拳の練習は己を知ること

太極拳の練習は幾つかの内容で組み合わせたものであります。套路練習、推手練習、単抄練習と散手練習です。套路練習は己を知り、推手練習は相手を知り、単抄練習は個々の技を有効に使えるための練習であり、散手練習は実戦練習であります。これらの段階を踏んで初めて実戦に挑むことが可能になります。現在主流となっている太極拳のほとんどは

套路練習ですので、己を知ることが太極拳の主要目的となっているはずで

では太極拳の套路練習ではどのような方法で己を知るとい

う目的を達成しようとしているのかを考えてみますと、その独特でゆっくりとした動きに起因するのではないかと考えられます。ゆっくりとした動きを行う時に考える余裕が生じ、終始意識的に行うことが可能となり、套路練習にとって「放松」ということは最も基本であり、要求される最高レベルのものと言えます。太極拳の最大の難関は「放松」であり、20年かかってやっと放松が分かったと言ったのは私の先生でした。毎日欠かさず練習して20年にしてやっと放松が分かったというなら、私たちのように週1～2回しか練習していない人にとって生涯得られるものではないかもしれません。それなのに諦めずにやっているのはこの「放松」に原因があります。

放松とは余分なものを省くことです。太極拳を実施する中では肉体的において余分の力、精神的において雑念を省くことが要求されます。余分の力を省くならばどの部位の力が必要な力で、どの部位の力は余分であるかは分からなければなりません。これは力を知ることなので、知った上で力の入れ方や使い方を知っておく必要があります、そして力を分かるということになります。(太極拳の中では力は「勁」と言う。)

余分の力を使わず上手に体を動かすには意識の導きが必要なのです。正確な意識の導きを得るためには、太極拳に関する知識の修得が必要となります。それを脳レベルの理解と言います。これに対し得られた知識に基づいて、意識の導きにより身体に正しくそれを反映させることを身体のレベルの理解と言います。同時にこれらの段階においてはすべて心の動きや雑念が伴っています。例えばこれでよいのか、他人の目はどう見ているのか、社会的評価はどうなっているのか、または、上手になりたい、格好よく見せたいというような心の働きにも影響されます。

このような一連の問題が絡んで同時進行している複数の要因は、どれも深みのあるものですので、探っていくと果てしなく難しく面白いのです。「放松」に近づいていくに従って身体の変化が起きます。その変化はものを語っていろいろと教えてくれ、再び認識を高め、一層確認を深めていける実感が得られるので、絶えず生涯続けられるのでしょ

おわりに：太極拳の包容力

太極拳の練習は鏡を磨く作業の如く、磨くほど段々と自分の姿がハッキリと映ってきて、自分と向き合うことができるようになります。この作業過程を経ていくことにより、心、身体などが映し出され、磨けば磨くほど心身ともに余分な力を省けて素直になれば、些細な喜びを感じ、心身とも充実し、健やかにしてくれるでしょう。この作業により生じる相乗効果が太極拳の付加価値となるでしょう。

太極拳の魅力に惹かれて愛好者が増えつつあるとはいえ、現代社会に生きる人々は何をどのように求めればよいのでしょうか。私たちはどのような方向へ導いてあげればよいのかを見極める必要があるでしょう。太極拳はとても包容力のあるもので、どのような求め方に対しても応じてくれます。だからこそ、いつの時代にあっても愛好され続けるのでしょう。太極拳になにをどのように求めるかは愛好者自身の選択ではありますが、なにを求めても、太極拳の套路練習は己を知

る作業であり、素直な気持ちで真剣に向かい合うときに初めて太極拳が自分のものになるでしょう。

(人体科学会関西ワーキンググループ編『触覚の復権』・2002・所載)

鈍磨する「からだ」

近年、日本の青少年の「身体感覚」が鈍磨してきているという指摘が多い。次に掲げるエッセイはその一端を示すものである。本講座では、「青少年の【からだ】の問題を考える」と題して、連携講座の主旨として、その「からだ」の問題とロータリークラブの求める「リーダーシップ」の問題との「かかわり」の所在を探ってみる。

『生身のからだ言葉』

関西大学 文学部
身体運動文化専修
教授 伴 義孝



歩行者にぶつかられた。満員電車で大きな手荷物にグイグイと押しつけられた。しかも加害者の若者はさらさら気づいていない。こんな経験をする御仁が増えている。御仁とは大抵が年配者。そして、「ウムッ、コレはどうしたことか」と頭を抱える向きもある。他者に気づいていないのだから「ゴメンナサイ」の反省もない。このごろ、こうしたコミュニケーションの欠如問題が大事件に繋がったりするケースも多い。

サル脳には、ミラーニューロンというものがあって、他者の身振りや周りの雰囲気から照らしてどのように行動すべきなのかを即座に構造化する機能が備わっているという。もちろん人間にもしかりなのである。つまりミラーニューロンとは生活世界（ひと・もの・こと）とのかかわりにおいて直覚する「勘ばたらき」の中核であって、このチャンネルの活性化しているとき、たとえば身につけた物などの扱いには状況に応じて直覚的に気をつけるものなのである。ところが昨今では、そうでないケースが頻繁にみられる。この問題は、視覚も聴覚もケイタイに釘付けの毎日なのだから、簡単に「さもありません」と片づけてはいけない身体感覚の異変なのだ。

ところで「人の振り見て我が振り直せ」と俚諺が教えてくれる。この際、「人の振り」は単なる視覚情報だけでない。かかわりに応じて「直せ」を即座に起動させる生身の「からだ言葉」なのである。サルを隔離して単独で育てたとする。すると、檻の外の出来事に無頓着になってしまっ、サルまねをすることもなくなるらしい。生身のからだでの「かかわり」を直接に紡ぎ出すことのない光学的視覚や音波的聴覚のみの情報受容だけではサルも人間も十全に発育しない。結果がああ「ウムッ、コレはどうしたことか」である。

さきごろ黒田亮の著書『勘の研究』が講談社学術文庫から日本の名著として復刊されている（2006年）。原典は1933年の刊行。同文庫に収められたのは1980年のことである。80年代といえば、日本の子どもの身体感覚が鈍麻しだしたころだった。それでも実生活での勘ばたらきはまだまだ健在であった。さても、ケイタイが登場しだしたのは1995年のあの阪神淡路大震災を契機としてのことである。そしていまや生活必需品。日本人の身体感覚が、勘ばたらきを埋没させるまでに、かくも鈍麻になってきたのにはそのケイタイの普及度とも無関係でない。こうした時機における『勘の研究』の復刊にはいかなる期待が込められてのことなのか。おりからメールを通じての「イジメ言葉」が問題視されている。言葉が視覚や聴覚のみでやりとりされると誤解が生まれやすい。さて勘ばたらきで「人の振り」をしかと確認するためには、そのかかわりの場を覚知できる身体感覚を磨いておかなければならない。復刊がこのことをも示唆してくれているのであれば意義は大きい。

講座に対する評価

参加者へのアンケート結果より

はじめに

新しい試みである本講座の効果と参加者の満足度や意見等を知るために、ワークショップ参加者全員に対して、下記の項目についてアンケート調査を実施した。なお、回答者は学生 55 名、ロータリアン 35 名、合計 90 名であった。

質問 1 : 今回の企画全般はあなたにとって有意義でしたか

質問 2 : 「やってみる」の経験はあなたにとって有意義でしたか

質問 3 : 「ミニシンポ」はあなたにとって有意義でしたか

質問 4 : 「グループ討議」はあなたにとって有意義でしたか

質問 5 : 自由記述式感想文

質問 1 から 4 については表 1 のような 5 段階評価を用いて点数化した。

表 1 評価点一覧

評 価	点 数
大いにそう思う	5
そう思う	4
普通	3
あまりそう思わない	2
そう思わない	1

アンケート結果

質問 1 から 4 についての 5 段階評価は表 2 のとおりで、いずれも高い平均点を示した。この結果から、いずれの企画も好評であったことがうかがえる。とくに「グループ討議」のポイントが高く、グラフ (図 1) のように各質問に対する回答の割合をみても、高評価がもっとも多かったことが分かる。

表 2 各質問の平均点

質 問	平均点
今回の企画全般はあなたにとって有意義でしたか	4.22
「やってみる」の経験はあなたにとって有意義でしたか	4.12
「ミニシンポ」はあなたにとって有意義でしたか	3.90
「グループ討議」はあなたにとって有意義でしたか	4.61

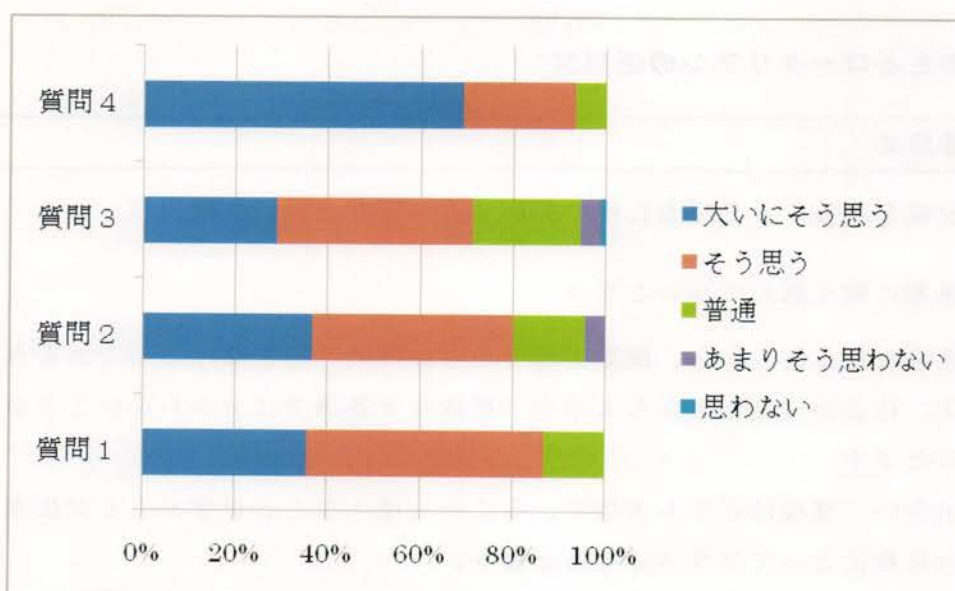


図1 各質問に対する評価

また、ロータリアンと学生との間で評価に差があるかどうか検討したところ、質問1-3について、ロータリアンの平均点が高いことがわかった。ところが、もっとも高評価であった「グループ討議」については有意な差が認められず、この企画に関しては学生も文句なしの高評価であったことがうかがえる。

表3 学生とロータリアンとの各項目平均点の比較

	質問1		質問2		質問3		質問4		
	n	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
学生	55	4.09	0.67	3.91	0.91	3.67	0.96	4.71	0.53
ロータリアン	35	4.43	0.61	4.46	0.56	4.34	0.59	4.49	0.70

このように、概ね好評であった今回のワークショップのなかでも、とくにロータリアンと学生が2対2程度の小グループで実施した「グループ討議」が高評価を得たことが明らかになった。普段は直接触れ合うことが少ない異世代、異業種間の対話が互いに大きな刺激となるはずという主催者側の狙いは、うまく達成されたといっていいたいだろう。

フィードバック

最後に、参加者の感想文をいくつか紹介しておきたい。いずれも肯定的な意見ばかりであるが、今後の参考にすべき内容について、以下の表4にまとめた。今後はこれらの意見を参考として、RYLAプログラムならびに大学授業のさらなる開発と発展を推進していきたいと考えている。

表 4 学生とロータリアンの感想文

学生の感想文
<p>違う価値観を知ることが出来たので実施するべきだと思います。</p> <p>正規の授業に取り組んで良いと思う。</p> <p>色々な経験を持った人から、授業で習うこと以外のことを聞けるので大変良いと思います。社会から見た私たち大学生の現状など普通では分からないことが分かり良かったです。</p> <p>人との出会い、交流はとても大切で、そこから様々なことを学ぶことが出来るので、自分自身にとってプラスになると思う。</p> <p>日頃、関わることの無いような方々の話を聞き狭かった自分の世界が少しは広がった。もっと広い世界を知るためにもこのような機会が必要ではないかと思った。新しい大学の授業が、展開できると思います。これから積極的にやるべきだと思います。</p>
ロータリアンの感想文
<p>もう少し学生達と話をしたいです。</p> <p>新しい企画で、とても良かった。産学連携は今後益々必要だと思う。犯罪が多い世代、からだのことを教えることが大切と思う。</p> <p>「実学」こそが大切だと思う。</p> <p>素直な大学生でした。中々20歳ぐらいの方との会話ができない今、いきいきとした顔に感激した。</p>

(関西大学文学部教授 三浦敏弘)

課題と展望

これまでみてきたように、国際ロータリー第 2660 地区青少年指導者育成委員会と関西大学文学部では、どこにも例をみない新しい試みとして、RYLA（ロータリー青少年指導者育成プログラム）と大学授業との連携講座を実施した。講座は、参加者であるロータリアンと学生双方にとって、さらには大学教職員らの関係者にとっても、非常に有益で、かつ多くの刺激に溢れるものとなった。

ただし、RYLAも大学側も、この講座をゴールと考えているわけでは決してなく、あくまで双方が構想する青少年の育成事業の端緒であり、今後の展開を見据えて、さらに新たな行動を起こしている。すなわち、RYLAプログラムの核である青少年指導者育成のための合宿を、関西大学の授業とジョイントして実施し、ロータリアンと大学生との、異世代、異業種間交流を通した新しい学びの場を創出しようというものである。

合宿のプログラムは、これまで大学体育の改革や循環型連携教育の開発を実施してきた関西大学文学部身体運動文化専修・体育学教室が開発し、ロータリー側は多様な国籍や年齢層の青年たちの参加を促し寄付講座としてこの授業をバックアップする。大学生は、2泊3日の合宿に加えて、前後2回ずつの学内での授業を経て2単位を取得することができる。こうした内容の、まったく新しい試みの連携講座を「寄付講座：かかわり学びの実践学」として、2008年度秋学期に開設することが決定した。

この新しい挑戦はしかし、一大学の授業として落ち着くことを目指しているわけではない。この試みを通して両者は「RYLA&大学授業連携プロジェクトモデル」を創出し、同プロジェクトモデルの社会的な活用（他大学と他地域のロータリークラブにおける実践）を呼びかけることを目標にしている。さらに両者は、大阪の地を「異年齢交流循環型のRYLA&大学人間交流文化創造の発信基地」として、地域密着社会貢献型の文化活動をとおして「大阪力」の高揚に貢献するという目的を共有しようとしている。

このような活動は、従来からロータリーが標榜してきた「社会奉仕」と「国際交流」いう目的に合致するものであり、21世紀社会が取り組まなければならない青少年育成という課題に対して、新しいかたちの「奉仕活動」として普及すべきものであると考えられる。

一方で、知識詰め込み型の教育が限界を露呈し、「生きる力」の育成までが叫ばれるようになった今日、大学においては、実践型、交流型の「新しい学びの様式」の開発が急務となっている。これまでのように、教室内で一方的な知識

の伝授という形式を中心とした教育では、新しい時代のニーズに応えることはできないのである。

ただし、今回のプログラムはたんにまっさらの新しいものを創出したというわけではない。じつは、異世代交流という目的のために、かつてはどこの地域や、あるいは会社組織にもあった「タテ」の関係を、学生たちの世代に違和感がないかたちで再生する試みでもあったのだ。

日本社会が育んできた「タテ社会」が崩壊しつつあるいま、同世代だけを隔離的に育てることによる青年の幼稚化や、社会性の欠如した「育ちそびれ」の問題が噴出してきている。日本文化のなかに根付いてきた生活の知恵でもある「タテ社会」を、全否定するのは簡単である。壊すことは誰にでもできるのだ。しかし、伝統的な「タテ社会」が持っていた優れた部分や社会的機能をうまく抽出して新しい教育に組み込むというように、「創る」ことは簡単ではない。だが、それこそが本当に求められていることであり、現実には伸びゆく若者を鍛え、育てるためには必要なことなのではあるまいか。

このように、今回のロータリーと大学が協働して取り組んだ新たな挑戦は、日本発の新世代対応型教育プログラムとして発展する可能性を大いに秘めている。今後、さらなる交流と、研究開発を促進していきたいと考えている。

最後に、この場をお借りして、これまで関わってくださったすべての関係者に御礼を申し上げたい。

(関西大学文学部准教授 安田忠典)

写真資料





